

用語はソグド語であるが、文字は矢張回鶻字であると主張し、¹⁹此の碑文は九世紀の初に當り、トルコ人のみならずソグド人も、遠東に於てその固有の言語を寫す爲に回鶻字を用ひたものであることを證明するものだと見た。自分は今こゝで深く此の問題を論ずることを避け、單に必要な程度に止めなければならぬが、要するにラドロフ氏の議論は偏見たるに過ぎないので、この文字がソグド字たることは疑を容れぬ。(たゞ念の爲に記して置かねばならぬ事は、ラドロフ氏は其著 *Altürkische Inschriften der Mongolei* の附圖中に、此の碑のソグド文の部の斷片をも收めたが、磨滅甚しくて讀み難いので、別に氏の考によつて字劃を填補したものを載せて居るが、之は此の文字を回鶻文字と見た氏の試みた填補であるから、全く信用に値しないことである。其の原形を見やうとするものは、磨滅しては居つても必ず碑から直接に撮つた拓本に據らねばならぬ)。ゴーチオ (Gauthiot) 氏の如きものを以て甚だ信じ難い説として、一顧をも與へなかつたが、²⁰無理もないことと思ふ。

かゝる次第であるから、今日に於ては此の第三碑は回鶻人の間に回鶻字の行はれた證據としては何等の價值を有しない。それでは其の外に漠北時代に回鶻人が此の文字を使用した場合があるかといへば、少とも今日知られて居る所では、一としてその例證は存しない。然も反對に彼等が從來の突厥文字を用ひて居た證據は現れて居る。即ちラムステッド (Ramstedt) 氏が *Zwei uigurische Runeninschriften in der Nord-Mongolei* として發表したものはそれで、其の中の一は回鶻人の作つた突厥文字の墓誌で、^{キルギス}黠戛斯人の子にして回鶻に在つた *Joglakar kan ata* の爲にしたものである。時代は明らかではないが、文中記載の事實から見れば、摩尼教の回鶻に輸入されてより後のものであることは疑無い。また第二のものは唐書に葛勒可汗磨延啜と記され、天寶六載(747)より乾元二年(759)